

田中 純著  
政治の美学

権力と表象

『政治の美学』という標  
題は、もちろんハンヤミン  
の複製技術論の結晶の言葉  
を念頭に置いたものではあ  
る。ハンヤミンは「政治の審  
美化」は、完全に否定的的  
メンタリティのうちに位置づ  
けられており、そもそも考  
察の対象からはずされてし  
まっている。一方、レトリ  
ック的にもそれに対置する  
かたちでハンヤミンが掲げ  
る「芸術的政治化」にして  
も、少なくともその語り  
られているマルクス主義的な  
コンテクストの手続き的に  
受け止められることには、今  
ではほぼほぼ肯定的であらえ  
ないところがある。

田中氏のこの著作は、こ  
の標題が含むそのような概  
念の危うさをかえって、自ら  
の力として取り込んでい  
る。「政治の審美化」と直  
接に結びつくハンヤミンにせ  
よ、あるいは日本の「右翼  
テロリズム」にせよ、この  
著作は、一般にきわめてネ  
ガティブな表象・反応によ  
って受け止められる対象

またとりわけそのように再  
構成された表象そのものに  
もあえて焦点を当てていく  
ことになって、政治的なもの  
の美的領域の關係性を描  
き出してゆく。われわれは  
ほごなどの場合、歴史的に  
「ナチズム」、「ファシズ  
ム」に結びついている対象  
に対して、これをいわずに絶  
對無の空間の中に入れて  
おいて、これら多様な領  
域を形成する主題群だけ  
を、それぞれ主題系に  
おいても各章(第一部から  
第四部まで)それぞれ三つ  
から四つの章を持つ)がま  
めて多彩な対象の拡がり  
を示していることが、これま  
での田中氏の著作と比べて  
も大きな特色といえるた  
う。

かつて書かれた論文を集  
めて再構成した著作——本  
な充足感を与えるものであ  
る。このかなり分厚い著作  
が、便宜的に全体をカバ  
ーする標題を与えられなが  
らも、しばしばパッチワ  
ーク的な寄せ集めの印象を  
免れないのに対して、この著  
作にはなほ強力な収束力  
が働いている。確かに、読  
者は書を通うごとに、次  
ら次へとまったく異なる対  
象のなかへと矢継ぎ早に連  
れてゆかれる。とはいえ、  
シヴァベルクのヒトラー  
である建築を政治的コンテ  
クストにおいて扱った第四  
部「表象論」は、これら四  
つの異なる主題系から構成  
されている。これら多様な領  
域を形成する主題群だけ  
を、それぞれ主題系に  
おいても各章(第一部から  
第四部まで)それぞれ三つ  
から四つの章を持つ)がま  
めて多彩な対象の拡がり  
を示していることが、これま  
での田中氏の著作と比べて  
も大きな特色といえるた  
う。

かつて書かれた論文を集  
めて再構成した著作——本  
な充足感を与えるものであ  
る。このかなり分厚い著作  
が、便宜的に全体をカバ  
ーする標題を与えられなが  
らも、しばしばパッチワ  
ーク的な寄せ集めの印象を  
免れないのに対して、この著  
作にはなほ強力な収束力  
が働いている。確かに、読  
者は書を通うごとに、次  
ら次へとまったく異なる対  
象のなかへと矢継ぎ早に連  
れてゆかれる。とはいえ、  
シヴァベルクのヒトラー  
である建築を政治的コンテ  
クストにおいて扱った第四  
部「表象論」は、これら四  
つの異なる主題系から構成  
されている。これら多様な領  
域を形成する主題群だけ  
を、それぞれ主題系に  
おいても各章(第一部から  
第四部まで)それぞれ三つ  
から四つの章を持つ)がま  
めて多彩な対象の拡がり  
を示していることが、これま  
での田中氏の著作と比べて  
も大きな特色といえるた  
う。

密度の高い表象分析

「ファシズム的」なものの本質へ

山口 裕之

政治の美学  
権力と表象  
田中 純 著



A5判・638頁・5250円  
東京大学出版会  
978-4-13-010109-7

かつて書かれた論文を集  
めて再構成した著作——本  
な充足感を与えるものであ  
る。このかなり分厚い著作  
が、便宜的に全体をカバ  
ーする標題を与えられなが  
らも、しばしばパッチワ  
ーク的な寄せ集めの印象を  
免れないのに対して、この著  
作にはなほ強力な収束力  
が働いている。確かに、読  
者は書を通うごとに、次  
ら次へとまったく異なる対  
象のなかへと矢継ぎ早に連  
れてゆかれる。とはいえ、  
シヴァベルクのヒトラー  
である建築を政治的コンテ  
クストにおいて扱った第四  
部「表象論」は、これら四  
つの異なる主題系から構成  
されている。これら多様な領  
域を形成する主題群だけ  
を、それぞれ主題系に  
おいても各章(第一部から  
第四部まで)それぞれ三つ  
から四つの章を持つ)がま  
めて多彩な対象の拡がり  
を示していることが、これま  
での田中氏の著作と比べて  
も大きな特色といえるた  
う。

桜井厚・山田富秋・藤井泰編  
過去を忘れない  
語り継ぐ経験の社会学

本書は、理不尽に襲って  
くる戦争・病い・差別・社  
会問題において「被害者」  
「患者」「被差別者」とカ  
テゴリー化された当事者が  
かかえらるも、もてかき  
を、彼らのライフストー  
ーに寄り添って解きほぐし  
た、優れた論文集である。  
ここでいう「もてかき」  
は、日系人強制収容所、被  
爆、薬害日イ、ハンセン  
病、末期がん、ユニーク  
エイズ、不登校、民族部  
落差別を経験した語り手  
が、過去の苦悶の日々を語  
ろうとするもの、聞き手  
(受け手)との圧倒的な落  
差のえに思わぬ語ること  
をためらってしまったり、  
語り継ぐことの困難から  
くるもの。しかしそれによ  
り人は語り出す聴かすには  
られない。そんなギリギリ  
のなかで、著者たちは「世  
代継承性」という概念を提  
示しながら当事者として  
あるいは、当事者と調査者  
のあいだで紡ぎだされる  
「ライフ」を丹念に聴き取  
っている。

語り継ぐことの可能性

「硬直した構え」を解きほぐすレッスン

足立 重和

対身会者八き初害のいたないに賭場とるとなると



いって書かれて学術的報告  
書や論文を求めても、今度  
は専門的過ぎて概略の把握  
が困難な手引きとなつて  
いる。また、本書の  
学研究会代表・日本考古学  
協会会員